

| | |
|---------------|---|
| Title | ニ-チエにおける認識の問題 : 世界生成と認識 |
| Author(s) | 柴崙, 雅子 |
| Citation | 年報人間科学. 5 p.129-p.144 |
| Issue Date | 1984 |
| oaire:version | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/11964 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

大阪大学人間科学部〔二九八四年二月〕

『年報人間科学』第五号 一二九頁―一四四頁

ニーチエにおける認識の問題

——世界生成と認識——

柴 寄 雅 子

ニーチェにおける認識の問題

— 世界生成と認識 —

I ニーチェの認識観の諸解釈

II 力への意志と認識

III 永遠回帰と認識

IV 世界生成における認識の意義

一九六八年に出版された『ニーチェの認識論選集』への後書きでハーバーマスは、長いこと等閑視されていたニーチェの認識論について、今日新たに議論を始めなければならない、と述べている^①。それ以来、ニーチェの認識についての考察を取り扱った論稿は、かなりの数に上っている。ただ、世界と人間とについてニーチェが開いた新しい視点を踏まえて彼の主張を説明したものは、余り見出せない。以下の小論の目的は、そうした世界生成を中心に置いたニーチェの認識観を闡明することである^②。

なおニーチェからの引用は、Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe* in 15 Bänden hg. v. Giorgio Colli u. Mazzino Montinari, 1980 の巻数と頁数で示す。例えば(3, 41)は第二巻四一頁を指す。

I ニーチェの認識観の諸解釈

ニーチェの認識に関する思想の再考に先駆的役割を果たしたダント^③は、ニーチェ哲学の中心構想をニヒリズムと捉え、認識論上の主要教説を真理の一致説の拒否と見なしている。ニーチェにとつて「世界は……我々が、刻印を押すべき白紙」である以上、真と見なされている事も、世界自体に備わる秩序や体制に一致しえない、と言うのである^④。またハーバーマスによればニーチェは、あらゆる認識は情動に基づく遠近法的解釈でしかないという批判から、真の世界など存在せず、判断の客観的眞理性について語ることは無意味だ、というニヒリズムの認識論的完成を導き出している^⑤。ではニーチェは、眞理の認識など虚妄に過ぎない、とだけ主張しているのだろうか。あらゆる知の探求を撥無してしまうような認識観だけを展開していたのだろうか。

確かにニーチェは「我々は自分が生きていけるような世界を設えた」(3, 477)と語り、世界観は言わずもがな、論理法則やカテゴリー、認知された直観的世界に至るまで、ありのままの世界を表わしていないことを強調する。個人的な衝動や欲求、民族や人類一般に

共通する本能、そういった無意識的な力によって人間の認識がどこまでも支配されていることを、彼は繰り返し言い立てている。そうなるが我々は「真理」をすべて失ったかのように見えるが、ニーチェはこうした事態を傍観している訳ではない。認識への懐疑がもたらす虚無的状况を乗り越える方途をも、彼は提示しているのである。

例えば芸術が、そのような事態を克服するのに大きな役割を果たすことを、アラスは指摘している^⑤。事実、初期のニーチェは、世界は理論的認識によって決して把握できないと論じながらも、「真に存在する者である根源的一者」(I, 38)について語り、人間は芸術活動を通じてこの一者と一体化し救済される、と説いていた。また芸術家形而上学を放棄した後も、芸術は「仮象への良き意志」(3, 464)を教えることによつて、認識の仮象性への洞察が引き起こす虚無感から人間を救ってくれる、とニーチェは考えていた。主観的に制約された人間の認識は、世界自体の把握ではなく仮象であるにしても、それを悲観せず芸術を築しむようにそのまま享受する、そういう視点の転換をニーチェは主張していたのである。

このような現実肯定的な方向を更に進めて、ニーチェは真理基準の一転をも提案している。グラムはその点を取り上げて、ニーチェが伝統的な一致説を克服し、「力の感情の上昇」という、より首尾一貫した新しい真理基準を打ち立てた、と述べている^⑥。認識の眞理性を問う時、実在との一致不一致はもはや何の関係もない。「問題は、当の判断がどれほど生を促進し、生を維持し、種を維持し、ことによると種を訓育しさえするのか、ということなのである」(5,

18)。一致説を厳密に受け取るなら、神の行なう無制約的認識しか眞理と呼べず、人間の認識は単なる仮象と貶められてしまう。それゆえニーチェは、神的認識に基づいた一致説を逆転させ、人間の生を中心にした眞理観の確立を企てたのである。彼のこうした立場は実用主義とも考えられている^⑦。しかしニーチェの意図は、目先の目的に適うものを真と見なす、といった狭量な改革ではないので、彼の説く眞理論は人間中心主義、主体主義と捉える方が相応しいだろう。既に一九四〇年の講義でハイデガーは、ニーチェの新たな眞理概念は「眞偽を無制約的に主体の思うがままにさせる」と論じている^⑧。

これまで述べてきた様々な解釈が、それぞれニーチェの思想の或る側面を照らし出していることは確かであり、それを否定するのが本論の目的ではない。認識における主観的制約、世界自体の不可知性、認識への懐疑がもたらす虚無感、芸術による救済、人間に立脚した眞理観の確立、これらのどの論点をとつても、それを裏書きするニーチェ自身の言葉が見出せる。問題は、彼が考えていたのはそれだけか、ということである。というのも、著作に散見する表現や八〇年代の遺稿を追ってみると、全く別の、そしてより斬新で徹底した認識観が浮かび上がってくるからである。人間と世界とを統一的に世界生成から理解することによつて、ニーチェは認識と世界自体との乖離そのものを解消させているのである。そうした彼の思想を以下では、まず力への意志を軸にして追跡する(II)。次に、力への意志である世界生成は永遠に回帰するともニーチェは論じている

ので、この方向からも彼の新たな認識論を説明する(Ⅲ)。そして最後に、世界生成における認識の意義を問題にする(Ⅳ)。

Ⅱ 力への意志と認識

ニーチェは認識の主観的制約として、本能、衝動、欲求などの無意識的な力を挙げてゐる。それらは決して一通りではなく、一人の人間の中に同時に相反する諸々の衝動がある。例えば生の維持という基本的な本能に抗つて、自殺してでも名誉を保とうとする欲求を持つ人もゐる。そこからニーチェは、意識に昇らない複数の力、複数の「主観」から一人の人間の認識主観が構成されている、という仮説を立てる。

「一つの主観」という仮定は、ことによると必然的なものではないかもしれない。多数の主観があつて、それらの共同と闘争が我々の思考、ひいては我々の意識の底に横たわつてゐる、と仮定することも同様に許されるのかもしれない(Ⅺ, 650)

一人の人間、一つの認識主観は等質の単一体ではない。それは互いに協力したり対立したりする諸々の衝動や本能、諸々の「主観」の複合体なのである。

そして一つ一つの「主観」、種々の方向を目指す本能や衝動などの力、それをニーチェは「力への意志」と呼ぶ。

「我々の基本的衝動の一つ一つが、あらゆる出来事や体験について別々の遠近法的評価を行なつてゐる。これらの衝動のどれもが、

他の衝動による妨害あるいは促進や追従を感じ、また独自の発達法則を持つてゐる(上昇と下降、テンポなど)。つまり一方の衝動が上昇している時に、他方の衝動は死滅してゆく。

多数の「力への意志」としての人間。各人が多数の表現手段と形式とを備えてゐる。(Ⅻ, 25)

「力への意志」は、権力を目指す各人の意識的欲求ではなく、他を圧して自らを発散させようとする無意識的な力を意味している。人間の認識を支配する複数の力への意志は、言わば様々な大きさと方向を持つベクトル、常に大きさを变化させるベクトルであり、これらのベクトルを総和してできる一つのベクトルが、一人の認識主観の遠近法に外ならない。

諸々の力への意志が総合されて出来る主観は、それ自身一つの力への意志として統一性を持つてはいるが、存続する実体ではない。

だからニーチェはデカルトの「我思う、ゆえに我在り」に反論する。「思う」が条件であり、「我」はそれによつて制約されている。つまり「我」は、思考自体によつて初めて作られる、一つの総合なのだ(Ⅻ, 73)

具体的な認識活動を行なう以前に、主観が不変の単一体として実在しているのではない。認識内容のみならず認識主観の虚構性をもニーチェは主張しているのである。

「主観」ですら他のすべてのものと同様、そのように創造された物、一個の「事物」である。即ち、措定し発明し思考する力、それ自体を、あらゆる個々の措定、発明、思考そのものから区別して

呼ぶために、単純化したものである。(12, 141)

認識主観の実体性なら既にカントが否定している。理性的心理学とは異なり、主観が永遠不滅で分割不可能な実体だ、と説明することを彼は退けた。我々が認識できるのは対象化された『我』だけであり、認識を規定する純粹統覚それ自体は認識できない、ということもカントは指摘している。その点をニーチェはデカルト批判として高く評価している。

「カントが証明しようとしたのは結局、主観からは主観を証明できない——客観も証明できない——ということだった。主観つまり『魂』が仮象の存在でありうるという考えは、彼にとつて必ずしも疎遠なものではなかっただろう。(5, 73)

理論的理性では把握できないと断念した『魂』の不滅性を、カントは実践的要請によつて取り戻した。ニーチェは、このような道德的配慮をせず、主観は虚構という思想を貫徹する。元々ニーチェの言う認識主観は、経験的要素を捨象した純粹な理性ではなくて、肉体を備え意識を持ちながら生きて活動する人間であった。それゆえ新たに実践的立場から魂の実体性を主張することは許されない。認識主観が仮象と言うならば、即ち主体としての人間が仮象だということになる。(10)

もちろんニーチェが虚構と見なしているのは、実体的主観であつて、変化し消滅する合成体としての主観ではない。主観が主観としてまとまりを持つていることを彼は容認している。ただ、そのまとまりの实在性や不変性に反対しているのである。「あらゆる単一体

は有機的組織や共同としてのみ単一体である。……それは一を意味するが、一で在るのではない支配形成体なのだ」(12, 104)とニーチェは論じているが、この言葉は自我、主観、個人にも適用される。これらは自我として、主観として、個人として単一性を備えてはいるが、変化せずに存続する実体ではない。認識を行なう「我」は、多くの衝動つまり多くの力への意志の共同組織としてのみ、「我」という単一性を保っている。

主観が実在しないならば、主観の制約も全く別様に理解される。身体を持つて活動する認識主観がまず存在し、その上で、この主観に付随する本能や衝動が世界自体の認識を妨げる訳ではない。諸々の本能や衝動、複数の力への意志がまず存立し、それらが統一体としての主観を形成しているのである。主観が力への意志を我が物として所有するのではない。力への意志の方が主観を成立させているのである。

認識主観を力への意志として把握することから更に進んで、ニーチェは認識の客観をも力への意志に還元する。

「我々の目、我々の心理といった付加物を除去しよう。そうすれば、いかなる事物も残らない。残るのは、他のすべての動的な量と緊張関係にある諸々の動的な量なのだ。こうした量の本質は、自余のすべての量への関係、それらへの「働きかけ」の内にある」(13, 259)

認識主観が諸々の本能や衝動などの共同と対立から組成されていたのと同様、事物や現象も相互に作用し合う力動的量に外ならない。

本能や衝動と同じく、この力動的量も他に働きかける力であり、他を押ししらを發揮しようとする力である。それらはすべて力への意志なのである。主観によって解釈される以前の世界は「我々が近づくことも定義することもできないx」(I, 880)とされていたが、それをニーチェは改めて力への意志と呼ぶ。認識する人間のみならず、認識される世界をも力への意志として把握する。それゆえ彼は次のように語るのである。

「この世界は力への意志であつて——他の何ものでもない。そして諸君自身もこの力への意志であつて、他の何ものでもないのだ。」(II, 611)

主観も客観も共に力への意志なら、認識は全く別の意味を帯びることになる。人間は世界をありのままに認識できないと主張していた際には、人間は自体的世界の外側に不動の主観として立っていた。だが今や、主観も客観も力への意志として世界生成の中に組み込まれてしまう。人間と自体的世界との差異は消え、主客図式は解体する。認識は、客観に対する主観の一方的な能作ではなく、諸々の力への意志、諸々の力動的量が相互に結ぶ関係ということになる。

「その中に住むという我々の条件を度外視した世界、我々の存在と我々の論理や心理的先入見に還元しなかつた世界は、世界『自体』として存在するのではない。

そうした世界は本質的に相関世界なのだ。それは事情によって、各々の点から見れば別の顔を持っている。この世界の存在は本質的に点ごとに異なっている。この世界はどの点も押す、どの点も

世界に抵抗する」(I3, 271)

「この世界はどの点も押す」といった表現から明白なように、人間の外にあるとされていた自体的世界は、単に静的な質料ではない。自体的世界も力への意志として、人間を構成する力への意志に作用するのである。

力への意志、力動的量が自余の一切に働きかける仕方、それをニーチェは遠近法と呼ぶ。

「どの力の中心も残り、全体に対して自らの遠近法、即ち全く特定の価値付け、行動様式、抵抗様式を持っている。

従つて『仮象の世界』は、一つの中心から出發して世界に向かう特殊な行動様式に還元される。

しかも他の様式の行動などありはしない。つまり『世界』とは、こうした諸行動の活動総体を表わす言葉に過ぎないのだ。(I3, 271) ここで「力の中心」とニーチェが言っているのは、一つの力動的量、あるいは人間のように複数の力動的量から成る統一的量のことである。各々の力の中心は、固有の遠近法を持つて他の力動的量に作用する。人間の認識も、そうした活動の一つである。ある人が認識した事物や概念や価値は、その人を構成する様々な力動的量が自余の一切の力動的量に働きかける様式を表わしている。人間が存在者を認識するのは、人間的主観としてまとまつた力動的量が、その統一的遠近法によつて他の一切の力動的量に抵抗し、それらを整理し、粹付けた結果なのである。

世界は点ごとに異なる様相を見せる、どの力の中心も独自の遠近

法を持つという思想は、力を本性とする单子が各々の観点から世界を表述するというライプニッツの单子論に似ている。しかしライプニッツの単子は、神の力に依らなければ創造も破壊もしない実体だが、ニーチェの言う「力の中心」は、そのような神の手になる持続の実体ではない。ニーチェ自身が「存続する究極的単一体、原子、単子など不在りはしない。ここでも『存在者』が、まず我々によって置き入れられている」(13, 36)と論難している。またライプニッツにあつては、自己意識を有する人間の単子は、叡知的魂として、物体や他の動物の単子とは異なり、神の国の一員とされている。それに対してニーチェの力への意志の世界に神は存在せず、人間も何ら特別な地位を占めていない。むしろ自己意識や自我は虚構とされ、諸々の力動的量に解体されてしまつてゐる。ここに両者の決定的な差異がある。要するに、ライプニッツの单子論は人間や動物といった個別的存在者の側から思惟を進めているのに対し、ニーチェは力への意志である世界生成から出発し、そこから人間と人間が認識する存在者とを把握しようとしてゐるのである。ニーチェのこうした思索について、次にもう少し詳しく見てみよう。

個々の力動的量が生起する必要性を、ニーチェは世界生成の本質から説明している。

「一体誰が快を感じるのか、一体誰が力を欲するのか。本質自体が力の意志であり、従つてまた不快を感じることであるなら、これは馬鹿げた質問である。だがそれにもかかわらず、対立や抵抗が必要であり、それゆゑ相対的に、干渉する諸々の単一体が必

要なのである」(13, 260)

生成世界は、力への意志であり力を欲するからこそ、多数の力動的量に分岐する。均質な一者においては、その諸部分が対立し、抵抗し合うことは考えられない。それゆゑ力への意志である生成世界は、様々の力の中心を暫時的に生起させ、それらに相互作用を行なわせることによつて、力を欲するという自らの本質を発現するのである。人間の主観を組成することも世界生成の活動である。人間による存在者の認識も、力への意志の發揮、生成世界の本質の顕現に外ならない。

生成世界を比喩的に表現して、ニーチェは次のように述べてゐる。

「一定の力として一定の空間を占める。しかもそれは、どこかが『空虚な』空間ではない。むしろ力として至る所に存し、諸々の力、力の波の戯れとして、一であると同時に『多』。積み重なつていく所もあれば、同時に減少していく所もある。我が身の内へ逆巻き溢れる力の海。永久に変化し、永久に還り行く。遙かな回帰の歲月と共に」(11, 610)

一切の力の中心は、ちょうど波のように、互いにおつかり合い常に大きさを向きを微妙に変えながらも、一つのものとしての統一性を一定期間保つてゐる。生成世界は、こうした「力の波」が寄せては返る大海のようなものである。男波も女波も現れては消える。だが海は、消えた波からまた新たに別の波を造り出していく。波立ちながら海は常に存在している。それと同様、力の中心も生起しては消滅するが、生成世界は消滅した力の中心から別の力の中心をま

た生起させる。一切の力の中心を生起させる力への意志として、生成世界は永遠に存立しているのである。自らの本質を發現するため、様々の力動的量を相互に作用させる世界生成の過程が、人間による認識の実相なのである。我々の意識内容も、世界生成の単なる結果、一表面に過ぎない。

Ⅲ 永遠回帰と認識

前節の最後の引用文で「永久に還り行く。遙かな回帰の歲月と共に」と表現されていたように、ニーチェは力への意志である生成世界と永遠回帰とを結び付けている。世界生成の過程が無限に繰り返されることを証明するため、彼はこう論じている。

「一定の大きさの力として、一定数の力の中心として世界を考え、でも構わないなら——そして他のどの考えも無規定で、それゆえ利用できないなら——この前提から結論されるのは、世界は算定しうる数の組合せを、世界の現存という大きな骰子遊びの中で通過しなければならぬ、ということである。無限の時間の中では、可能な組合せはどれも、いつか一度は達成されているだろう。それどころか無限回、達成されているだろう。また、一つの『組合せ』が『回帰』する間に、およそ可能な限りの組合せはすべて経過していなければならず、これらの組合せのどれもが、同じ系列に属する組合せ全部の継起の条件となっているので、先の前提から絶対的に同一の系列の循環が証明されることになるだろう。既

に無限の回数反復し、自らの遊びを無限に渡って遊ぶ循環としての世界」(13. 376)

先に使った海と波の比喩を引き続いて用いるなら、ここでニーチェが仮定し推論している内容は次のようになるだろう。海の表面積が一定しており波の数が不変であるならば、多数の波が海面に描く相貌は有限数しかない。次々に相貌は移り行くが、一瞬間の波がぶつかり合うことによつて新しい相貌が生れる以上、先行する相貌は一瞬後の相貌を制約することになる。更にその数が有限であるため、いつか一番最初の相貌に戻り、諸々の相貌から成る系列を一巡することになる。そして再び現れたこの相貌は次に現れる相貌を制約するので、先の系列と同様に第二の相貌へと移行する。こうして、無限の時間が流れる間に、同じ系列が何度も何度も繰り返されるのである。

以上のようにニーチェは、力への意志から永遠回帰の思想を説明しようとするが、その最初の仮定に難があると思われる。力の大きさが一定だというのは首肯できる。個々の力動的量は力の大きさを増減させるにせよ、それらの総体である生成世界は一定の力しか持たないだろう。仮に生成世界が力の大きさを変化させるとしたら、その作用を受ける何者かが生成世界の外に存立せねばならないからである。しかし力の中心の数が一定という仮定には問題がある。あらゆる単一性は暫時的に単一性を意味するだけだ、という彼の主張からすれば、力の中心の数は変化してもいいし、また無限個であっても構わないはずである。更に時間についても、通俗的な時間概

念、人間の時間了解から独立して流れ続ける直線的時間概念を、無反省に採用している。

ここで示された基礎付けに難点が含まれているとはいえず、生成世界は永遠に回帰する、とニーチェが考えていたことは確かである。

その証拠に、永遠回帰を正当化するための議論を彼は他にも幾つか展開している^①。彼は力への意志と永遠回帰とを統合したものとして、生成世界を捉えていたのである。力への意志である生成世界は力動的量が相互作用する活動総体であり、世界生成の位相は無限の時間の中で一定の周期を以て繰り返される、このことがニーチェの新たな世界理解の眼目なのである。

世界生成が一定の周期で回帰する以上、また一切の力動的量の生起は永遠回帰の中で必然的な位置を占める以上、力動的量の相互関係である人間の認識も必然的であり、直線的に進展せずに反復することになる。一連の位相を無限に繰り返す世界運行の中で、人間の存在も自由を選択されたものではないことを、ニーチェは強調している。

「人間の本质が宿命的であることは、かつて存在したものと今後存在するもの一切が宿命的であることから切り放せない。……人は必然的である、人は一個の宿業である、人は全体に属する、人は全体の中に在る」(6, 96)

「全体」の中に、回帰する世界運行の中に人間の存在は組み込まれている、と彼は主張しているのである。そんな人間が行なう認識も、やはり宿命的ということになる。

生成世界の必然的な運行から認識を捉える思想は、ハイデガーやハーバーマス、グリム^②などが強調するニーチェの人間中心的思想に真向から対立するように見える。一定の周期で生起する力動的量の相互作用という認識観と、真の哲学者が自覚的に世界を解釈し、枠付けて未来を切り開くという認識観とは、背反するように見える。しかし両者は同等の主張権を持って、互いに排斥し合う訳ではない。なぜなら前者は後者を自らの内に包含してしまうからである。人間が新しい遠近法を創造し、新たな世界像を立てることも、複数の力動的量の相互関係として理解できる。未来を自分の思うままにできるという意識も、人間を組成する力への意志が共同あるいは闘争した結果として把握できる。また、認識の主観的制約を説きながらも人間に定位する認識観は、人間の位置付けに関して背理に陥っている。つまり、あらゆる存在者は人間が自分の衝動に従って虚構した、と主張しながら、衝動が宿る身体や自分を育てた他者は、存在者であるにもかかわらず、虚構されたものとは考えていないのである。世界生成中心的認識観とはいえば、人間を組成する力動的量から着手し、身体も他の主観も力動的量に還元して、この背理を解決している。こちらの方が、より包括的な思想なのである。

他方、アラスが言及しているような、芸術を重視するニーチェの見解は、世界生成に基づく認識論に類似していると考えられる。もちろん初期のニーチェは、力動的量、遠近法、永遠回帰といった用語を使っではないし、充分な反省を経ずに、根源的の者は自己を救うため仮象を欲すると仮定している。また晩年のニーチェは芸術

に訴えず、人間と世界とを力への意志として理解することから、両者の一体性を説き明かす。しかし自覚的人間に立脚せず、根源的二者や世界生成といった言わば人間存在の根拠から見返しているという点で、ニーチェの芸術家形而上学は世界生成の思想と同一線上に位置している。

こうした対比から判るように、世界生成から捉えた認識観は最も徹底した内実を持つている。元来、人はありのままの世界を認識できないとする主張は、主観と客観とは全く質を異にする別物だという前提の上に立っていた。初期のニーチェはこの前提を認めた上で、認識ではない芸術という手段に頼って、自体的世界と人間とを結び付けた。人間は意図的に世界を解釈し図式化できるという主体主義的な立論も、予め世界の外に人間が存在すると見なしている。それに対し世界生成に立脚する認識観は、主客の絶対的区分そのものを解体してしまう。認識は第一義的には力動的量相互の関係であり、主観は暫時的な力の中心であって、客観から独立して実在する訳ではない。認識を力への意志である世界生成の必然的な契機として捉え、実体としての主観を認めない以上、主観である人間があらままでの世界を認識できない、という言葉辞は意味を成さなくなる。世界生成から認識を解釈し直すことよって、認識と自体的世界との乖離は土台を失い、解消してしまうのである。

IV 世界生成における認識の意義

人間のあらゆる認識を必然的な世界生成の活動として把握する認識観は、認識への懐疑を根底から崩壊させるが、それと同時に認識そのものの意味を希薄にしよう。リンゴが木から落ちるのも、私がリンゴを食べるのも、私が「リンゴは赤い」と知るのも、すべて等し並に力動的量の相互関係へと還元されてしまう。「遠近法」「解釈」といった言葉も、認識だけでなく生成世界のあらゆる活動に適用される。世界生成の一切が、力動的量が固有の遠近法に則して自余の力動的量を解釈し、屈服しようとする過程なのである。こうした一元論的見地に対しては、同じ世界生成とはいえ我々の認識も事物の運動も何ら変わる所はないのか、という疑念が当然出てくる。本節ではこうした疑問を念頭に置いて、ニーチェの言う世界生成における認識の意義について考察してみよう。

ニーチェによれば認識は、幾つかの力動的量からなる人間という力の中心が、その統一的遠近法に従って他の力動的量を解釈し整理し枠付けることである。しかし人間が意識しうるのは、解釈され整理された結果でしかない。力動的量が繰り広げる支配や抵抗の運動は絶えざる流動であり、人間の認識活動は、まさにこの流動に外ならない。しかし意識が流動そのもの、解釈や整理の過程を捉えることは不可能なのである。それは丁度、人間と時間との関係に似ている。我々は時を過ごし、時の流れの中に在るけれども、この流れそのものは意識に昇らない。我々が意識できるのは、太陽の位置の変

化や時計の動きといった、時間が経過した結果だけでしかない。無論、世界生成において一切の力動的量が必然的な系列に組み込まれて生起するからには、それらの相互関係の結果である我々の意識内容も、世界運行の中で必然的な位置を占める。とはいえ生成世界の動的契機である力への意志を強調する限り、人間の意識内容つまり認識活動の結果は、飛翔するジェット機が残す飛行機雲のように、付随する余計者に過ぎなくなる。

現にニーチェは、意識性を軽視した発言をしばしば行なっている。「多数の衝動——それらの内に主人が一人いると仮定せねばならないが、その者は意識の中でありはしない。意識は胃と同様、一つの器官である」(11, 282)

無意識的な力である諸々の衝動の方が主人であり、意識はその主人が利用する道具、「器官」に過ぎない、と言うのである。世界生成が示す活動そのものである本能や衝動を重視する余り、ニーチェは哲学を否定するような見解さえ述べている。

「ギリシヤの哲学者達の許では本能が、下降していたことが判る。もしそうでなければ、意識された状態の方をより、価値のあるものとして見なすなどという誤りを、彼らは仕出かしはしなかつただろう。……

実際我々は完全な生を、意識化されることが最も少ない所に求めなければならぬ。……

良識、善良な人、あらゆる種類の「取るに足りない人々」の事
実への還帰。

決して自らの原理を意識することなく、また原理の前では少し身震いさえするような何世代にも渡って貯蔵されてきた正しさ、賢明さ。(13, 313)

人間の意識に昇る一切のこと、また認識活動を介して獲得した知識のすべてが、生成世界の中では取るに足りない、とニーチェはここで主張しているのである。

では、力への意志が作用し流動する中で、意識内容は不必要な淀みでしかないのだろうか。衝動や本能などは力動的な世界生成と一体化しているのに対し、整理され粹付けられた状態である意識は、確かに生成世界における余分な残滓のように見える。ニーチェのようには、生成世界における活動や作用といった動的契機のみを強調する限り、この結論は正しいであろう。しかし生成世界は、絶えず変転するだけでなく、永遠回帰するのである。ニーチェ自身は殆ど議論を展開していないが、我々は生成世界のこの側面からも認識について考えなければならぬ。

まず永遠回帰について再考してみよう。時間は永久だが力動的量の組合せの数は限定されている、という仮定から永遠回帰を証明する仕方は先に述べた。その外にも、力への意志と連関させてニーチェは永遠回帰の解明を試みている。

「生成に存在の性格を刻印すること——これが最高の力への意志である。

存在者の世界、留まるもの、等価値のものなどの世界を維持するために、感覚からと精神からとの二重の偽造。

万物が回帰するということとは、生成の世界が存在の世界にこの上なく接近することである。考察の絶頂。(12, 312)

この断片で「力への意志」「生成の世界」と「永遠回帰」「存在の世界」とをニーチェがどのように結合させているかを辿ってみよう。

力への意志である生成世界は、その本質を発現するために多数の力の中心を生起させる。人間という力の中心は、他のすべての力動的量を解釈し整理し粹付けて、存在者と見なす。形なき力動的量を存在者という型に嵌め込むこと、それがニーチェによれば力への意志を表現する最高の状態なのである。流動的な自余の力動的量に對立し抵抗するだけでなく、それらに持続的な図式を押し付けることが、力への意志の最高の發揮なのである。生成世界自体も、その本質である力への意志を最高度に発現するため、外ならぬ自分に図式を刻印する。絶え間なく変転する生成世界が自らに与える型と言えば、一定数の位相を繰り返して運行することによって作る永遠回帰の輪しかない。生成世界は不断の流動でありながら、一連の位相を何度も反復することによって型を作り上げる、即ち統一性をもって持続する存在者を作り上げる。こうして生成世界は、存在者から成る「存在の世界」に酷似してくるのである。

力への意志は、その最高の表現である型を欲する。それゆえ力への意志を本質とする生成世界は、永遠回帰の輪を自らに刻印する。こう解釈すると、力への意志と永遠回帰とを統一的に理解できる。更にニーチェの重要な対概念であるディオニュソスのものとアポロンのものと、生成世界との関係も明らかになる。ニーチェは処

女作の『悲劇の誕生』を回顧して、ディオニュソスの及びアポロンの心理的根柢経験について次のように語っている。

「両者の経験の対立、及び両者の経験の根柢に潜む欲求の対立。アポロンの欲求は現象を永遠に欲する。この欲求を前にして、人は静まり、満ち足りて風ぎ、癒され、自らとあらゆる存在とに同意する。ディオニュソスの欲求は、生成へ、生成すなわち創造と破壊の歡樂へと押し進む」(12, 115)

ここでアポロンの欲求とディオニュソスの欲求との「対立」と言われているが、ニーチェは両者を敵対し排除し合うものとは捉えていなかった。アポロンはディオニュソスの言葉を語り、ディオニュソスのものが隆盛する時アポロンのものも共に勃興する、と彼は考えていたのである(1, 155)。ニーチェはアポロンを「あらゆる造形力の神」「個体化の原理の神像」と呼んでいた(1, 274)。つまりアポロンのものとは、個物や形象のように統一性をもって持続する存在者を指している。アポロンの欲求は、そうした存在者の世界である「現象」が永遠に在ることを欲する。生成世界におけるアポロンの契機が、まさに永遠回帰なのである。ディオニュソスのものとは、「個体化の原理」を打ち壊す力であり、「陶醉」の内に示される躍動である(1, 281)。ディオニュソスの欲求は留まることを知らず、不断の創造と破壊を欲する。生成世界におけるディオニュソスの契機が、力への意志なのである。

ディオニュソスのものが創造と破壊を行なうためには、創造され破壊される存在者、即ちアポロンのものを必要とする。それと

同じく力への意志も、自らを最高度に發揮するためには、力動的量の位相を永遠に回帰させなければならない。永遠回帰と力への意志、存在者とその創造や破壊、アポロンの契機とディオニュソスの契機、これら両極が一つになって世界生成を織り成しているのである。

ところがニーチェ自身は、永遠回帰に固執しながらも、それを力への意志と調和させた議論を充分に展開していない。アポロンの契機を無視するかのように、彼は生成世界を「永遠に自らを創造し、永遠に自らを破壊する、この私のディオニュソス的世界」(II, 611)と呼ぶ。力への意志が有する創造や破壊といった側面を強調する余り、最高の力への意志が必然的に存在者を欲することを軽視している。もちろん、現象は我々の遠近法的な解釈の結果だということを示すためには、存在者が虚構に過ぎないことをさしあたり喧伝せねばならないだろう。とはいえ人間の認識を還元して力動的量の相互

関係に至り、世界生成の必然的な活動にまで辿り着いたなら、そこから折り返して再び我々の認識を捉え直すことが必要である。世界生成を単に不断の流動として理解するなら、人間の認識内容つまり事物や概念といった存在者は、場違いの淀みでしかない。対立し抵抗する作用だけが生成世界の本質であるなら、作用の結果である我々の意識は、余計な残滓に過ぎない。しかしそうしたディオニュソスの契機だけに注目せず、ニーチェ自身が取り出していたアポロンの契機にも目を向けるならば、人間の認識すなわち「生成に存在の性格を刻印すること」は、最高の力への意志の發揮であり、生成世界の中で卓越した章義を持つことになる。生成世界は力への

意志として、型を欲している。物事を認知し、概念的に把握する人間の認識の営みを通じて、生成世界は最高度に力への意志を發揮しているのである。無論、生成世界が永遠回帰するからには、人間の認識も一定の周期で循環する。人間の意識は力動的量が相互に作用する結果である以上、意識の方から力動的量の関係を調節したり、意識的に知の進展を図ったりすることは不可能である。とはいえ我々のあらゆる認識は、生成世界の最高の顕現として、どこまでも肯定されるのである。

ニーチェ全集の編集者コリーは、その後語の中で、ニーチェは通俗的で「公教的」な思想だけでなく「秘教的な」思索をも繰り広げていた、と語っている(13, 651ff.)。本稿で論じた世界生成に基づく認識論は、そうした秘義に当るように見えるかもしれない。しかしニーチェは、「秘教的」体験の中に閉じ籠ってしまわず、あくまで語り続けた哲学者である。それゆえ彼の言葉に神秘主義者の影を追うよりも、そこに開かれた新しい視点を明確にし、熟考を重ねる方が肝要であろう。まだなお不明瞭な点が幾つも残されている。例えば、認識主観と身体とのつながりや主観の自己同一性をニーチェはどう捉えていたのだろうか。力動的量と存在者の連関はどうなっているのだろうか。こうした問題については、また稿を改めて検討したいと思う。

註

(1) J. Habermas, Fr. Nietzsche, Erkenntnis-theoretische Schriften.

Frankfurt/M. 1968 の後書 p. S. 242.

- (2) 本稿は筆者の修士論文『ニーチェにおける認識の問題——認識論的ニヒリズムを巡って——』に基づいている。芸術との関係や主体主義的な観点といった、他の解釈者も既に論じているニーチェの認識思想の問題を、本稿では主題的に取り上げていない。そうした点の詳細については前掲論文を参照されたい。

(3) A. C. Danto, Nietzsche as Philosopher, New York 1980, p. 61.

(4) J. Habermas, a. a. O. S. 256.

- (5) J. D. Arras, Art, Truth, and Aesthetics in Nietzsche's Philosophy of Power, in Nietzsche-Studien Bd. 9, 1980 参照。アラスは『悲劇の誕生』におけるニーチェの芸術観についてこう述べている。「芸術の救済的機能は、深淵の上に幻想のペールを広げ、現実へのディオニュソスの洞察がもたらすニヒリズムの帰結から、我々を守ることである」(a. a. O. p. 248)。だがニーチェは、苦悩する根源的一者は自己救済のため悦楽に満ちた仮象を必要とする、という「形而上学的要求」を立てている(1, 38)。また、仮象を産み出す芸術の中でも特に音楽は、現象を越えた世界自体、即ち根源的一者と、象徴的に関わりうることも主張している(1, 51)。つまり、人間が音楽によつて真に存在する一者に触れて、自己の無常性から解放されると同時に、一者も音楽によつて苦悩を癒されるのである。本文で述べるように、この時期のニーチェにとつて芸術は、単に深淵を蔽うペールではなく、根源的一者と人間とが一体となるための紐帯なのである。

(6) R. H. Grimm, Nietzsche's Theory of Knowledge, Berlin, New York, 1977, S. 25f.

(7) 例えば O. Fr. Bollnow, Das Doppelgesicht der Wahrheit, Stuttgart, 1975, S. 23.

(8) M. Heidegger, Nietzsche II, Füllingen, 1961, S. 199.

(9) カへの意味にこころを W. Müller-Lauter, Nietzsches Lehre vom Willen zur Macht, in Nietzsche-Studien Bd. 3, 1974 及び同著者による Nietzsche: Seine Philosophie der Gegensätze und die Gegensätze

seiner Philosophie, Berlin, New York, 1971 を参照。

- (10) ニーチェは身体をも「諸々の下位意志」「諸々の下位の魂」「多くの魂の共同体組織」と呼んでいる(5, 33)。

(11) ニーチェは自分の求める世界構想について次のように語っている。「もし仮に世界の運動が或る目的状態を持つていなら、それは既に達成されていなければならないだろう。しかし唯一の根本的事実は、世界は何ら目的状態を持つていない、ということなのである。……私はこの事実に対して公正な世界構想を求め、生成は、そのような目的論的意図に逃げ込むことなく、説明されねばならない。生成は、どの瞬間にも正当化されているように(あるいは同じことだが、価値を奪い取れないように)見えなければならない。現在を未来のために、あるいは過去を現在のために正当化することは断じて許されない」(13, 34)

ここで直接には言及していないが、彼の意を満たす世界構想として、永遠回帰がニーチェの念頭にあったと考えていいだろう。しかし目的状態を持たず、しかも永遠に別の様相を呈する世界構想も想定できるので、永遠回帰に関するこの補助的解説は余り説得力を持っていない。永遠回帰を説明するもう一つ別の考え方については次節で述べる。

(12) グリムは前掲書の中で、晩年の遺稿を駆使してニーチェの認識論を闡明している。ニーチェにおける人間中心的思想を専ら強調する多くの解釈者と異なり、グリムがニーチェの企てた主観の解体を確認していることは、次の言葉から明らかである。

「……自我、主観、我思う等の伝統的用語で個人について考えることを、ニーチェは許さない。ニーチェにとつて個人は、単一性を備えた実体的で等質の実在物ではなく、『我』とか『自己』とかいった用語に、極めて一時的で遠近法的な類いの妥当性しか彼は与えていない」(a. a. O. p. 156f.)

また「恐ろしく世界構成の過程は、カへの意志による『自己解釈の過程』だと主張しても、誤りではないだろう」(a. a. O. p. 159) という推定から判るように、ニーチェが世界生成の側から認識を捉えようとしている点

も、グリムは押えている。にもかかわらず彼は、ニーチェの立てる新しい真理基準は人間が自覚する力の上昇感だと解釈し、こう結論している。「私が思うにニーチェの意図は、『すべての認識は解釈だ』という原理を使って、我々はより良い新たな解釈を我々のために創造せねばならない、ということなのである。しかもこうした解釈の創造によって、彼の立場は正当化され真とされるのである。ニーチェの認識論のパラダイムは、理論的というより実践的な目的を持っている」(a.a.O. p. 197)

結局グリムも、人間中心的認識観をニーチェの主要教説として論じているのである。しかしニーチェによれば、主観が意識する感情や思考は、意識に昇らない力動的量が相互に作用して生じる結果なのだから(26)意識の側からは意識内容を操作しえないはずである。力動的量の位相が変化した末に、力の上昇感を或る主観が意識することなら起こりうるだろう。だが実在物ではない主観が、自らの持つ力の感情を高めるような解釈を意図的に創造することは、不可能なのである。グリムは力への意志だけからニーチェの認識論を理解し、永遠回帰には全く触れていないが、そのためにニーチェの主観批判の射程を計り損ねているように思われる。なおニーチェ哲学における自己意識の止揚、無意識の強調については、矢島幸吉『ニヒリズムの論理——ニーチェの哲学』一九七五年、福村出版を参照。